

我が国の実証的宗教心理学研究への期待

日本心理学会第81回大会公募シンポジウム「(宗教心理学研究の展開14)
指定討論 末田啓二 (神戸親和女子大学)

1 心理学研究として宗教や宗教性、スピリチュアリティ(霊性)を取り上げることの意義

- ・我が国における宗教・霊性に関するイメージがきわめて特殊(カルト、うさんくさい、眉つば物、)、ネガティブな色合いが強い(歴史的背景)
- ・心理学の世界でも宗教やスピリチュアリティを扱うことは異端視されやすい(非科学的)
- ・これらのテーマは忌避される傾向にある(心理学テーマではない)
- ・現代の心理学ではエヴィデンスを重視、実証性が優先される。心理臨床分野でもしかり。
- ・指標や測定尺度の合理性、妥当性が問われる。
- ・宗教やスピリチュアリティは文化・歴史の影響を強く受け、一般化・普遍化が難しい。
- ・学際的研究分野の傾向が強く、多くの変数の統制や概念の統一化が難しい。
- ・研究方法が確立されていないため、既存の方法を適宜援用するか、新しく開発する必要がある。

⇒我が国の宗教心理学は逆風の中で船出したと言える(勇気あるテーマ選び、進路選択)。

- ・一方、医療・看護・介護・福祉などの分野では、これまで多くの宗教団体が設置・運営を担ってきた。これらの分野では宗教、スピリチュアリティはこれまで同様重視されている。
- ・教育界においてもスピリチュアリティを重視するシュタイナーらのホリスティック教育がここ50年来注目されている。特に高齢者を対象にした研究や実践では、宗教、スピリチュアリティは避けて通れない課題である。
- ・学際的研究やコラボレーションは時代の流れ、宗教世界もエキュメニズムへ方向へ(第二バチカン公会議など)。特に宗教性やスピリチュアリティは人間固有の心理特性と考えられ、パーソナリティの中核部分を構成しているといえ(WHOの健康規定)、当然心理学の研究対象になりえる。

⇒心理学研究で宗教性やスピリチュアリティを忌避する理由がない。

2 話題提供者へのコメント

① 大橋先生(日本における老年学、医療、看護、介護領域でのスピリチュアリティ研究の現状と今後の展望)

- ・文献検索による文研研究、レビューの重要性が示唆されている。特に新しい分野では然り。
- ・宗教性とスピリチュアリティの定義から、両者は全く異なる概念と考えるか、またどのように関連すると考えるか(スピリチュアリティはより包括的概念ととらえるか。)
- ・なぜ研究量がスピリチュアリティ>>宗教性なのか(医療、看護、介護領域に限定したためか、それとも定義や概念の違いからか。また宗教性は宗教学や文化人類学、民俗学など他の分野で扱われるためか)
- ・今回のシンポのテーマが物語るように、宗教性やスピリチュアリティが、特に高齢者(高齢社会、超高齢社会)にとって重要な役割を果たしている根拠を、多くの視点から検討する必要性が示唆されている。→例えば positive 心理学、健康心理学の視点から

② 河村先生(高齢者施設における利用者のスピリチュアルケア・宗教的な関わりの現状と課題)

- ・高齢者施設では利用者・家族だけでなく、施設職員のスピリチュアリティや信仰の重要性が指摘された。このことは単に介護技術だけの問題ではなく、介護職員の内面にも関わる問題であることを示唆し、総じてスピリチュアルケアやスピリチュアルペインの軽減に反映。
- ・特に終末期では宗教行事はスピリチュアルペインや家族へのケアに寄与
⇒スピリチュアルペインへの介入効果研究として、次の中里先生のご研究と同様、今後どのような指標を設けるか、またどのような影響要因を想定するか。

方法として観察法、行動評定法、面接法の他、どのような質問紙法が有効か。

③ 中里先生（終末期がん患者の「スピリチュアルペインのアセスメントとケア」の現状と課題）

ここでのスピリチュアルペインの概念は、ホリスティック臨床教育学での概念に近似（ただしスピリチュアリティと宗教は異なるとの立場。）

スピリチュアルペインモデル→アセスメント→ケア計画・実践→評価とモデルの修正
統制群を用いての本実践研究のスタイルは、臨床現場でのアプローチとして極めて実証的である。
介入効果研究の代表例が事前テスト・事後テスト統制群法である。ただし今回のように被験者によっては負担が重すぎる場合がある（倫理上の制約も）。しかし短期回想法はわが国でも多用されている。

④ 川島先生（高齢期における死と宗教）

死を表現する言葉は実に多様である。それだけ死に対する捉え方、死への不安は年代や性によって大きく異なる。死への不安が老年期に低下するという現象をどのように解釈するか、宗教性やスピリチュアリティとの関係で論じることができる。また適応の観点からも検討できる。例えば青年が高齢者のような多くの喪失（身体的・知的、社会的側面など）を経験すれば、正常な精神状態でおれないだろうが、高齢者の多くは極めて健康な精神状態に留まっている。高齢者にはどのような適応様式が備わっているのだろうか。

事例研究と実証的調査研究。この領域の研究では常に事例研究と実証的調査研究とが双方向に行き来する。事例研究から一般化を目的とする調査研究へと発展する一方、調査研究の知見から事例研究に進む場合もある。一例として

本研究にある、一高齢女性の事例研究（ライフストーリー）から、例えば女性の結婚による改姓や婚家の宗教への移行によるアイデンティティの再構築過程などの実証的調査研究に発展させることもできる。また介護主体の多くがいわゆるサンドイッチ世代にあり、介護負担が高齢者の被介護への態度を規定することであろう。家族を包括した事例研究も必要であろう。

3 今後の方向性・展望

① 「宗教心理学」の呼称について

社会通念として宗教は狭義に捉えられ、いわゆる創唱宗教に限定されている。欧米などでは問題ないが、わが国では自然宗教（以前は原始宗教、神道、山岳信仰など）も広く宗教に入ると考えられるので、宗教を広義にとらえる意味からも、またスピリチュアリティをも含める意味からも、宗教性心理学の方が適当かも（森本, 2017）。

② 研究対象について一既成の宗教、宗派・教派など、特定の集団や所属員の心理的特性や、集団内影響作用についての研究のほか、日常生活に生じる無意識的宗教的行為や思考、心理現象についてもっと目を向けては。例えば甲子園の高校野球での女子高生の祈りなど。

以下は多くの人々が日常生活の中で経験する無意識的宗教的行為や心理現象の例

A) アニミズム心性（擬人化、擬人法など）。筆者も尺度を構成し、小学生・青年・高齢者に実施。古来のしきたりや、風水、占い、おみくじ、縁起物、巡礼、お守り
針供養、ぽっくり信仰（ぽっくり寺：p p k）
SL マニア（感情移入・がんばれ！）、船長は船と運命を共にする一機械にさえ我が身に感じる。
以上より我が国の文化・慣習はアニミズム心性が強いことが予想される。しかしこの心性は人類共通の心理特性の1つ。

B) 高齢者に見られる適応様式—喪失による苦痛の軽減という視点から

- ・宗教性の増大—救い、慰め、安心、など

- ・ポジティブバイアス・ポジティブエフェクト→ポジティブ心理学

- ・老年の超越（Tornstam, 1989）—EH Erikson の自我発達過程の観点からは理解できる（第9段階）。しかしわが国では老年の超越が超高齢者特有の心理的特性とは言えず、必ずしも高齢者に限った特性とは言えないのでは？⇒日本人の自我構造（河合, 1976）との関係

4 我が国における実証的宗教心理学の今後

・松島（2016）の指摘—ユダヤ・キリスト教の枠組みからの脱却。宗教を継続的に信じること（宗教的信念）に限らず、宗教にまつわる事柄に対して「感じ体験すること（宗教的感情）」「行うこと（宗教的行為）」にもっと目を向けるべき。この指摘は日本における宗教心理学はもっと日常活動の中に潜在する原初的宗教性、スピリチュアリティに注目することの必要性を意味する。

・我が国は有利な研究環境—純科学的（宗教文化、社会通念など宗教、特に特定の宗教のバイアスが相対的に少ない。歴史的・文化的には東西文化が混在し、混沌状態とも言えるが、新しい方向性を見出す出発点になるかも。我が国における実証的宗教心理学の存在意義がここにある。

・宗教性の起源—宗教への意識化過程—発達研究へ（民族・文化に共通のプロセス）

・多くの人が経験する宗教的な原初的体験やスピリチュアリティの特徴などに関する基礎的研究から始めて、既成宗教との関係性へ。換言すれば信仰の質的変化過程を追求すること。特定の宗教集団や教派を対象にした場合は、従来のユダヤ・キリスト教の枠組みからの脱却が難しい。また研究の広がりが期待できない（テーマが特殊な場合、研究者が閉鎖的となりやすい。）

これからの課題例

- ・情操教育（生命や自然への畏敬など）への基礎資料の提供
- ・概念の整理—他分野とのすり合わせ（例；スピリットー霊、精神、心、魂など）
- ・culture-free の指標・尺度による国際比較研究の推進
- ・学際的研究（他分野とのコラボ）の促進
- ・被験者の選択（サンプリング）を慎重に。特に高齢者は個人差が顕著で、統計に乗りにくい。